

ラウンドテーブルⅣ報告

総合的な学習における音楽表現は、教科学習の音楽表現をどう変えるのか

時得紀子（上越教育大学）

今日の小・中学生の表現力、コミュニケーション力の課題への対応は従来の音楽科の諸活動ではもはや培いきれないとされ、それを打開すべく「ドラマ科」などの実践に取り組む中学校の模索からは多くの示唆が得られた。教科書の暗記にとどまらず、他者とかわりながら、感性を共有し合って表現を共に構築していく中学校のミュージカル活動の実践へも参加者の活発な討議が寄せられたことは意義深い。

今年度のその他の音楽教育の諸学会でも取り上げられた、「今後は広義のコミュニケーション能力を培うことこそが、音楽科の果たせる重要な役割だろう」との提案が、まさに転換期を迎えた音楽科を象徴している。本ラウンドテーブルの提案は、小町谷聖（上越教育大学大学院所属・長野県安曇野市立穂高南小学校）による、上越教育大学附属中学校「創造表現科」の実践を巡ってである。その後本題とのかかわりや今日的課題にも迫った討論が展開された。

1. 提案内容

同中学校は平成16年度より3年間文部科学省の研究開発学校の指定を受け、現行の国語科、数学科、社会科、理科、英語科、音楽科、



美術科、体育科、家庭科、総合的な学習の時間などの8つの新教科に統合・再編する「さくらPLAN」というカリキュラムを実施している。その「さくらPLAN」の中に、音楽、美術、総合的な学習の時間が一体化した新教科「表現創造科」を設けた。そして、音楽、美術と総合的な学習との一体化により、単独教科では設定しにくかった「総合芸術的な表現活動」の学習を可能にすべく、多様な表現活動に取り組んだ。このカリキュラムは、3年生の12月に学級ミュージカルを公開することを学びの集大成とし、4月から120時間あまりを費やす。また、1、2年生ではそのミュージカルに繋がる授業として「表創TT」の時間に、舞台表現を意識した授業の単元開発を行い、次のような実践を試みている。3年生のミュージカル活動への前段階として、2年生対象「手づくりショータイム-舞台芸術に挑戦-」(2006年2、3

月 2年生) や、3年生対象の「声とからだでハーモニー-Let's Enjoy! Chorus & Dance-」(2005年10月3年生)などを体験することで、多様な表現の探求や、舞台装置の効果的な扱い等についての学習を積み重ねていく。そして、3年次の「体験!総合芸術-ミュージカル」(2005年4~12月)における音楽表現については、テーマの決定、シナリオの検討、音楽・美術・ダンスのパート練習などを経て、本番の発表会は地域公開で12月に実施される。

2. 討議内容（主に参加者から出された意見から）

(1)・実践としては良いのだが、一般校において、音楽科の授業を基に、どのようにこの本格的な実践を組み込んだらよいかかわからない。

- ・コーラス&ダンスの実践などは、身体表現を取り入れつつ、子どもたちの日常生活と音楽科の実践を近づけるという意味で、効果的な活動であろう。

- ・ドラマ的な表現を大切に、ミュージカル活動にも取り入れ、生かしていくことが大切であろう。

- ・附属中学校のミュージカル活動全体のカリキュラムの時数はとても多く、学びを深めるのに充分だ。

- ・音楽科教育の質は、その内容を教科内容、教科と教科、教科と総合学習等のつながりで広げて深めていくもの。また、総合表現では他者との関わりの中で実際に体験することで学びを長期的記憶に留める。

3. 今後の課題

- ・テーマを核として各教科が関連するスタイルが多い中で、表現活動を横断させて活動していくこの実践の方が、生徒の主体的な表現活動の模索を助け、ひいては教科学習の音楽表現の幅を広げよう。

- ・附属中の表現創造科の表現の基盤になるのが音楽表現であり、この総合性や拡張性を教科学習にも取り入れていくことが望まれよう。また、この視座から、研究推進校以外の一般校においても充分活動の応用は期待できるであろう。

- ・コミュニケーションという今日的学力を培うこととのできる音楽科ならではの学びを認識し、今後の実践や評価の手がかりに生かしていくことが大切であろう。